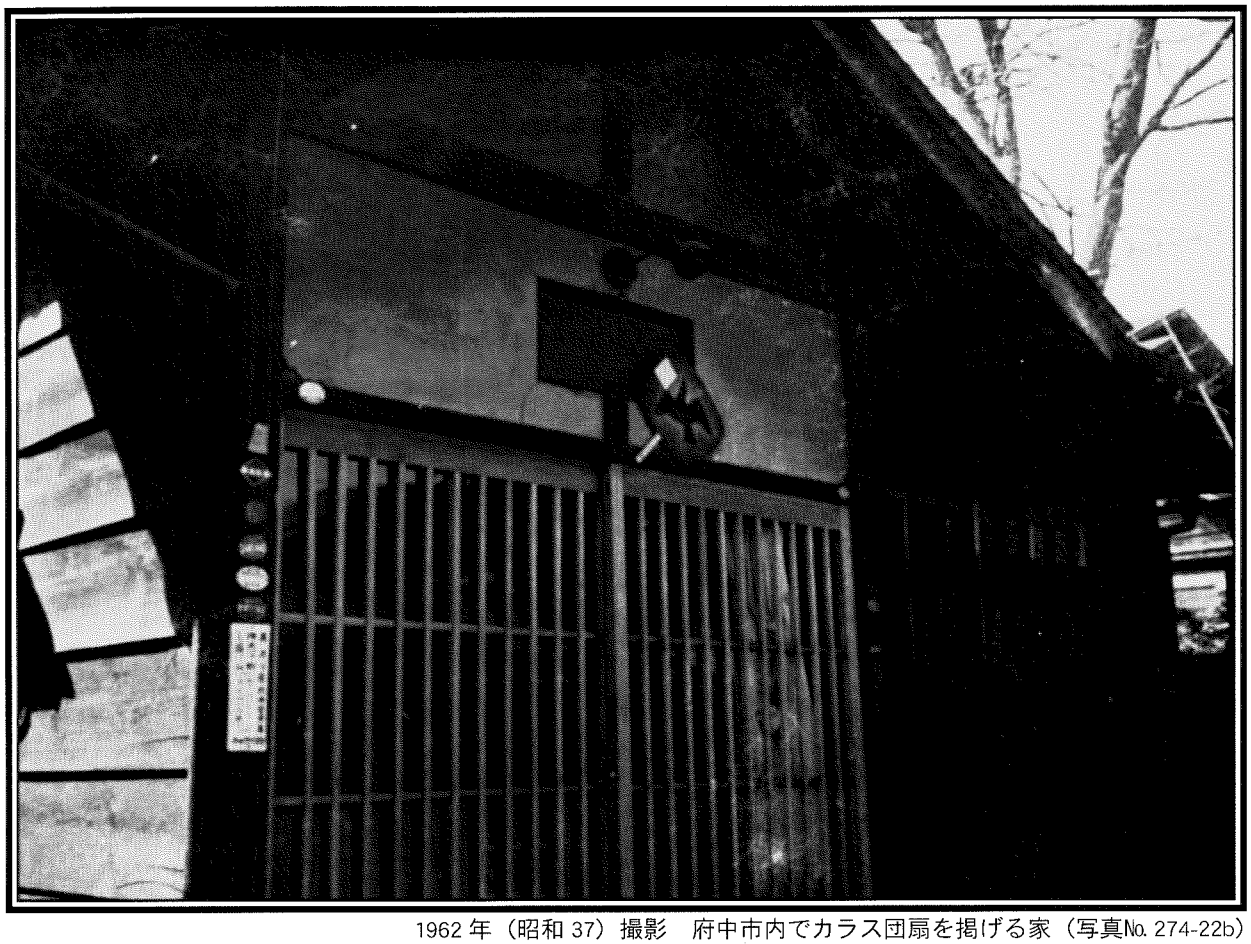
あるむぜお76

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 76　2006年6月20日



1962年（昭和37）撮影　府中市内でカラス団扇を掲げる家（写真No. 274-22b）

目次

1-2 宮本常一の見た府中 その5
家の外に掲げるまじない

3 展示会案内 特別展
坂本昇久写真展　宙風（SORAKAZE） オーロラ

4 収蔵庫のニューフェース

5 最近の発掘調査
「武蔵国衙跡」市の史跡に指定

6-7 ノート　天文普及事業＊これまで と これから

8 昨年度資料受け入れ・利用状況報告

9 刊行物案内

10 展示室リニューアルトピックス　①

府中市の町家では大国魂のカラス団扇（うちわ）や高幡不動の天狗団扇を入口の上にあげている家がある。いずれもまじないめいたものであるが、表通にはなやかな店がならび、いかにも近代化したように見えつつ、裏通りには古くからのしっとりとした生活を続けている人も多いのである。とくに在来の住民はその生活をみだすまいとする気持もつよい。

宮本常一「町のくらしの変遷」
（『府中市史』下巻　1974年）より

表紙：宮本常一の見た府中⑤　家の外に掲げるおまじない

佐藤智敬

宮本常一が、いかにも民俗学者らしく冠婚葬祭などを撮影したものは、全体の写真の割合からすると少ないかもしれません。しかしそこに写る人々のくらし、そのくらしの背後に息づいているものには、民俗学者として間違いなく関心をはらっていました。

宮本の撮影した府中市内の写真のなかには、家や神社などの建築物を撮影したものが多く含まれています。彼が編集をした『府中市の現存草葺民家調査集』（1969年）を刊行するにあたっての写真もあるでしょう。屋根や干されている洗濯物をも含んだ建築全体、撮影当時の日常生活を連想できるような写真が大半を占めます。それらは間違いなく建築そのものや町並みなどに注意をはらい、撮影していたと思われます。

しかし、今回取り上げた彼の視線は、建築物そのものではなく、建築物にとりつけられたモノに焦点をあてた撮影といえるでしょう。当時の壁、窓の様子などを知る手がかりにもなりますし、入口に張られている表札やプレートなどから、生活の規範を読み解くこともできます。それだけでなく、そこに写る現在では防犯性が疑問視されるような格子戸の上部に、電球の外された外灯、掲げられる団扇…。こうした佇まい自体、現在では見ることが難しい貴重な風景だと思います。

宮本自身はふたつの写真を『私の日本地図　武蔵野・青梅』のなかで同じ頁の上下に配置し（表紙の写真が下、この頁の写真が上）、それぞれ、「節分の魔よけ　府中市新町」、「カラス団扇　府中市」とキャプションをつけ、市内に残る古くからの生活の風景を説明する写真として使用しています（ちなみに本誌74号で紹介した門松を立てずに竹飾りを立てている写真は、今回紹介した写真の次のページに掲載された写真です）。

カラス団扇は、李子祭で配られる団扇です。李子祭は、毎年7月20日に大國魂神社で行われます。境内ではスモモを売る店などが立ち、にぎわいます。そこで配られる団扇は、門前に掲げておくと五穀豊穣・悪疫防除・厄除になるとされているのです。そのため毎年多くの人が団扇を求めて神社に詣でます。

同じように家の外に掲げるまじないとして、宮本はカラス団扇以外にも節分の魔よけを撮影しています。節分の日にイワシの頭を焼いて、それをヒイラギの枝にさし、豆がらとともに玄関や蔵の入口に挿しておくと、悪事・災難を逃れられるとする風習は、府中周辺に限らず全国各地にあるようです。

彼の日記を読む限り、宮本自身は大國魂神社で行われる節分、あるいは李子祭に参加した形跡はありませんし、当日の神社境内を撮影した記録もありません。そして、それらの行事の意味、信仰の起源などを探究しようとする視点も持っていなかったようです。しかし、この2枚の写真からも、それらの行事が行われ、人々に受け継がれていることには興味を持っていたといえます。

現在でも、節分にヒイラギの魔よけを挿したり、カラス団扇を門前に掲げる家はあるでしょう。しかしその数は減り、なかなか見ることはありません。家の構造も変化し、打ち付けられる柱が少なくなった現在では、カラス団扇をいただいて来ても屋内で飾ることが多いように思います。

写真は、昔から当たり前のように行われていて、不変のものと思われていたかもしれない風景が、徐々に失われている典型例でしょう。意図的か偶然かは分かりませんが、そんな風景を宮本は残したことになります。

ところで、表紙の写真は、具体的にどこのお宅を撮影したものか定かではありません。心当たりのある方、ぜひ情報をお寄せください。

1966年（昭和41）頃撮影（写真No. 577-21b）
ヒイラギの葉とイワシの頭を挿す家

展示会案内

特別展　坂本昇久写真展
SAKAMOTO.NORIHISA
7.22(土) ～ 9.3(日)

宙 SORA KAZE 風 オーロラ

宇宙にも風が吹いているよ…
地上にいる僕たちは、風に吹かれているものを見て、風の存在に気付くだけで、風そのものを見ることはできないよね。
だけど、僕が行くお気に入りの場所に行くと、風が見えるんだ。
色とりどりに輝く風…宇宙と地球の境目で吹き荒れる光の風…宙風を。

坂本昇久

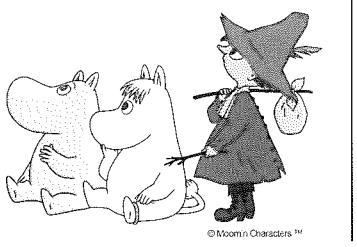
オーロラ
・・・・・ノーザンライト（北極光）、空の高いところで輝く光。
　それはガラス管の内側に詰まったネオンガス中を電気が走る時に生じる決まった色の光・・・・つまりは街のネオンサインと同じ原理。
　夜空を彩る光のカーテンは、空の高い位置でのみ出現します。地球の大気より遥か上空からやって来る高速の電子や陽子が、大気中の主に酸素や窒素と衝突して発光する現象だからです。しばしば七色に飾られる虹のイメージと混同しますが、虹は空気中の水分に光が反射して生まれるもの。オーロラの色は、赤・緑・ピンク・水色・・・・酸素や窒素という気体の持つ性質によって決まります。
　地球の上層大気に電子の粒たちを運ぶもの・・・・それは太陽から吹く風なのです。大きな岩が川の水流を分けるように、磁気圏がバリアーとなって、地球が直接太陽風を受けることはありませんが、いくつかの電子の粒は磁気圏の境界を越え内側に入り込んで来ます。やがて個々は大気と衝突して光を放ちますが、目に見えるオーロラになるためには、大気の１平方cmあたりに毎秒１億個の電子の粒が飛び込む必要があります。ですからオーロラを見る条件は、場所的にもタイミング的にもかなり制約されていると言えましょう。

　簡単には訪れないオーロラとの遭遇を撮り続けている写真家がいます・・・・坂本昇久氏。極寒の夜空を翔ける光の装飾はもちろん、氏はオーロラを通じて宇宙に吹く風を表現しているのです。　（中村武史）

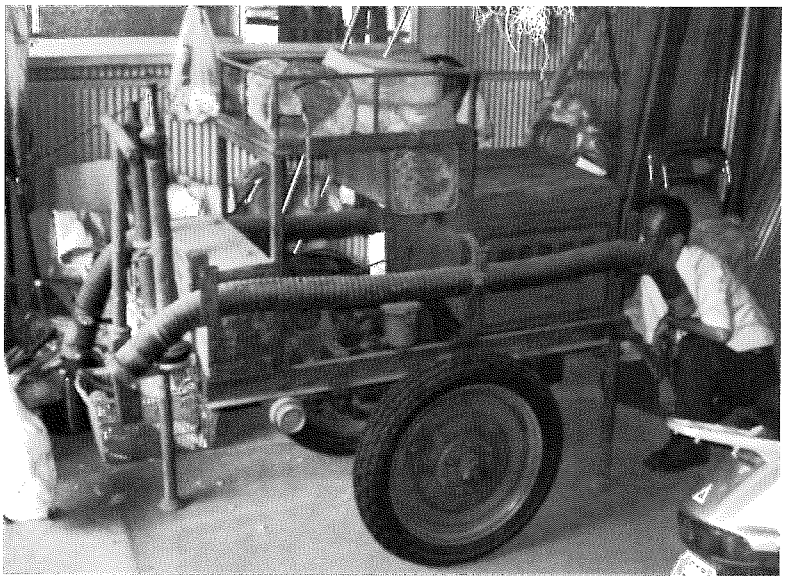
9月3日まで
同時公開

ムーミン谷のオーロラ

プラネタリウム番組も
オーロラ写真展とタイアップ！
セットでお楽しみください
ネッ！



収蔵庫のニューフェース



動力式消防ポンプ
寄贈：西府消防団第 16 分団

毎年 1 月 26 日は文化財防火デーです。1949 年（昭和 24）のこの日、奈良の法隆寺が火事で焼けたことから、1955 年（昭和 30）に制定され、現在にいたっています。府中市郷土の森博物館も、復元建築物など、複数の文化財を所有していることから、防火意識を忘れないようつとめています。

近年、当館でもこの日にちなんで、年末から 1 月にかけて、「消防のむかし」展を開催しています。かつて使用された消防道具類を展示し、梅にはまだ早い、水遊びには寒い冬季のイベントのひとつになりつつあります。ボランティア資料整理班の皆さんの力を借り、これまで博物館に収蔵されながらも、展示される機会が少なかった資料に着目しようというこころみでもあります。

消防道具についてのさまざまな資料を次々と収蔵してきたからこそ、このような展示ができます。消防署が完備されるまでの消防組時代の半纏（はんてん）、纏（まとい）、火災・鎮火を知らせる半鐘（はんしょう）、各家で所有していた消火用水鉄砲（みずでっぽう）（龍吐水（りゅうどすい）とも呼ばれます）、消防ポンプなどが次々と集まっています。

そして昨年、新しく動力式の消防ポンプが一台仲間として加わりました。西府（にしふ）消防団第 16 分団（府中市四谷（よつや））より寄贈を受けたその消防ポンプは、1943 年（昭和 18）に整備されたものであることが打ち付けられたプレートからわかります。製造は市原喞筒（ぽんぷ）という会社です。この会社は、国産初の動力（蒸気式）ポンプを製作した会社としても知られています。消防団員の家に眠っていたものが再発見されました。

今回寄贈されたポンプは、リヤカーほどの大きさです。エンジンがついており、動力で水を放出する力を持っています。さらに手回しのサイレンがついていて、ハンドルを回すと「ウゥ～！」という音を発します。自走することはできません。

消防ポンプの導入は幕末から明治頃と言われています。それらは手押しのポンプで水を送り、放水していました。それは「腕用喞筒（わんよう）」と呼ばれており、当館にも明治大正頃の消防を知る手がかりとして複数収蔵しています。今回新たに寄贈された動力ポンプはその後継として作られたもので、消防自動車に移行する以前の動力ポンプです。消防署が整備され、消防自動車が普及（ふきゅう）していくなかで、このポンプが大々的に市域で活躍する場は少なかったようです。そのためか、ホースを含め、状態よく保存されていました（タイヤについては、寄贈を受ける前にあらかじめバイクのタイヤに替えてありました）。

このポンプは、消防技術の変遷（へんせん）を知ることができる貴重な資料であると判断し、博物館で新たに保管することになりました。民俗資料と呼ばれるものの大半は、より古いもの、道具の起源を探れるものを集めていると思われがちですが、それだけではありません。来歴や使用の記憶が定かであるもの、道具自体の変化、分布の状態が判別できるものも、もはや満杯に近いとはいいながら、収蔵スペースがある限りは受け入れたいと思います。

最近の発掘調査

「武蔵国衙跡」市の史跡に指定

宮町二丁目　府中市教育委員会　塚原　二郎

北側の建物跡（白線は柱穴の跡）

本年３月28日、武蔵国衙跡が市の文化財（史跡）に指定されました。国衙域では、初めての史跡指定です。

国衙は武蔵国府の中心になる役所で、都から赴任してきた国司や、その配下の官人たちがさまざまな政務や儀式を執り行った中枢施設である国庁も、そのなかにあったと考えられています。

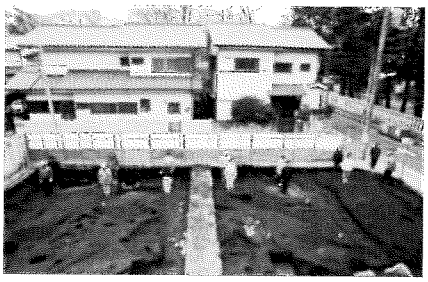
武蔵国衙跡については、大國魂神社境内地内を含む東側に存在したことが、これまでの調査結果から確実視されていました。平成17年から始めた神社のすぐ東側に面した宮町２丁目５番地の調査で、東西に長い建物が南北に２棟並んでいたことを確認し、ここが国衙の中枢の「国庁」の一角であった可能性が急浮上しました。今回、この調査区が史跡として指定されたのです。

この調査区では、一辺1.5m、深さ1.0ｍ前後もある大きな柱穴がたくさん見つかりました。その配置から２棟の建物跡が明らかになりました。北側の建物跡は東西26.0ｍ、南北11.5ｍ、南側の建物は東西20.3ｍ、南北8.4ｍと推定できました。これまでに市内で見つかった建物としては最大級です。

重要なのは、これらの柱穴に３回以上の掘り直しの痕跡を確認できたことです。当初、掘立柱式で建てられ、最終的には礎石式の建物に替わっているようです。つまり、建物は同じ場所で建て替えを繰り返していて、長期間にわたって同じ建物配置が維持されていたことがわかります。

こうした状況から、これらの建物がきわめて重要な建物であることは間違いなく、国衙を構成するものとわかりました。

幸いにして、この２つの大型建物跡がみつかった遺跡は、調査後に市有地となり、市の文化財（史跡）に指定できました。市では今後、市民共有の財産として市民とともに保存・活用していきたいと計画しております。ご理解とご協力をお願いいたします。



南側の建物跡

人の立っている場所が柱の位置。右側の木立は、大国魂神社境内の社叢。南側の建物も、北側の建物も大規模で、建物の範囲は発掘調査区の外に及んでいる。

NOTE

馬場弘修

天文普及事業
これまでとこれから

今年３月、環境省による排気ガス規制と車両の老朽化に伴い引退した**移動天文観測車ペガサス**の活動内容と今後の展望を紹介する。

1990年
新車の
ペガサス

活動最終日（2006年３月21日）の太陽観望会

★移動天文観測車ペガサスの導入に至るまで

総合博物館の当館には1987年（昭和62）の開館当初からドーム直径が23メートルというプラネタリウムがあり、現在でも平面床式では日本最大級の規模を有している。プラネタリウムでは毎日雲ひとつ無い満天の星空を観覧者に提供できるが、ドームに映し出される星は、光源の電球、星に相当する小さな穴の開いた板、ガラスのレンズによって作り出された擬似的なものでしかない。

自然科学の分野に限らず、博物館の事業として実際に自分の眼で本物を見ることが大切であると考え、プラネタリウムだけの天文普及ではなく、一般の方々に太陽や星空に親しんでもらうことを目的とした観望会を定期的に継続してきた。観望会では日々変化する太陽黒点の様子や、季節によって移り変わるさまざまな星座、月や惑星などを当館が所有する組立式望遠鏡で観察し続けてきた。このような事業を地道に行っている中で、昭和から平成に変わる頃当館での天文普及に大きな転機を迎えることとなった。

東京都が1989年度（平成元）に行った「ふるさと・ふれあい振興事業」の対象事業として、府中市は移動天文観測車の導入を決定したのである。この車はディーゼル仕様の４トントラックをベースとし、荷台のコンテナ部分に天文台仕様の口径20センチメートルのクーデ式屈折望遠鏡を据え、その上には直径２メートルの観測ドームを乗せる特殊な改造をしたものであった。この車を導入することにより、それまでは博物館の敷地内でのみ開催していた観望会を市内へ出かけて行えるようになり、いわゆる「出前観望会」が天文普及の大きな柱として加わることとなったのである。

市民の方々に、より親しんでいただこうと観測車の愛称を一般公募したところ、“動く天文台”ということから、ギリシャ神話に登場する“自由に空を飛びまわる天馬”の名前をとった「ペガサス」が採用されることとなった。

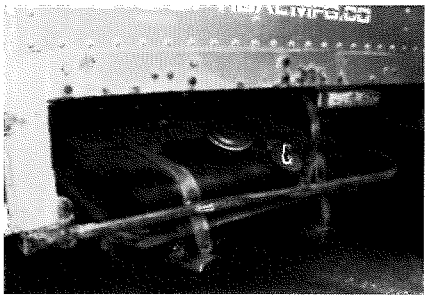
★ペガサスでの活動は・・・

1990年４月のお披露目式は、愛称募集で採用された方々への記念品贈呈などが「スターウォーズ」のテーマ曲が流れる中でマスコミ各社も交じって盛大に行われた。その直後に行った星空観望会には、過去最高の約350名が参加（現在の最高記録は2003年８月の星空観望会「火星大接近を見よう」で一晩に900名以上！）し、大人数の対処に不慣れだった職員と運営スタッフたちは嬉しい悲鳴を上げた夜であった。それ以後、市内の小中学校や町内会行事、コミュニティ施設での催事、市のイベントや東京競馬場での花火大会、

姉妹都市の長野県八千穂村（現：佐久穂町）、市の保養施設がある山梨県の清里などへ出かけ、最後の活動となった2006年(平成18)3月21日(祝)の太陽観望会までの間にペガサスの望遠鏡で観察をした人数は約20万人となった。

★ペガサスはただ消え去るのみ・・・？

しかし、年月と共に車体の老朽化は避けられず、2003年10月に施行された、東京都のディーゼル車規制に対応できる装置は付けたものの、エンジン型式が古いことから、環境庁のNOX・PM法に



引退直前の老朽化が目立つ車体

より次回の車検が受けられないので、惜しまれつつも2006年3月に引退することが決定した。

引退後の「出前観望会」は館が業務で使用しているワンボックスカーに既存の組立式望遠鏡を積み込む形で活動を継続させる予定であった。しかし、この件が新聞やテレビのニュースなどで報道されると、それを見た市民や周辺地域の方々から「子供たちが星に触れる機会を無くさないで」とペガサスの活動を継承する車の導入を望む声が多数寄せられた。それらの要望に府中市が敏速に応え、今年度内に急遽「新ペガサス（仮称）」を導入することが決定したのである。

★ペガサス運用での問題点と今後の展望

およそ16年間運用していたペガサスの車両の大きさは、路線バス並みにもかかわらず普通免許による運転が可能であった。しかし、館の職員が安全に運転するには大き過ぎたため、運送会社に運転委託をしていた。市民の方々が「出前観望会」を計画する際には、ペガサスが設置できる広い会場を探す必要と、運転を外部業者に委託していることで天候の急変による対応にも制約があった。車両の大きさが起因となるこの二つの要素が、ペガサスを運用する上で担当職員のストレスになっていた。

新ペガサスでは、これらのことを解消すべく従来の車両の形（望遠鏡での観察時には階段でコンテナ部分へ乗り込む）を踏襲せず、普通免許を持つ職員が安全に運転できる大きさのワンボックスカーをベース車両（望遠鏡は台車に固定し、観察時に台車ごと電動リフトで車両から降ろす）とする方向で計画を進めている。これらのことから、従来は入れなかった狭い会場での開催も可能となり、運転委託の経費も削減できることとなる。また、ペガサスよりも車両がコンパクトになるにも関わらず、この仕様ではペガサス以上の口径を有する望遠鏡を積載できる。さらに、会場で急に天気が悪くなった場合でも参加された方々に星空を楽しんでいただけるよう、直径約4メートルのエアドームと簡易なプラネタリウム投影機も併せて導入する。今まで以上にいろいろな可能性を持ち、またさまざまな試みも積極的に行うことができる新ペガサスは、遅くとも年明けには博物館へやってくる予定である。

★「世代を超えた活動」を目指して

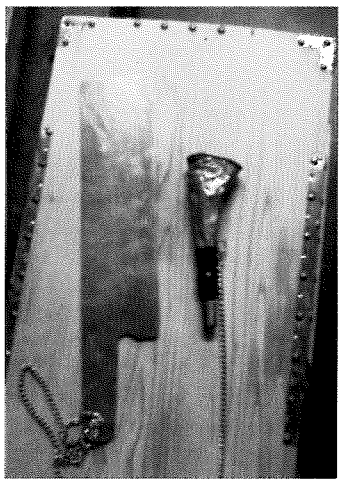
ペガサスの導入当初、その望遠鏡で観察をした小学生たちはとっくに成人している年齢である。大人になった今でも心のどこかに月のクレーターや土星の環を見たときの感動が残っていて、親として自分の子供にも同じ体験をさせたいという気持ちさえあれば、この事業は今後も発展し続け、地域に根ざした世代を繋ぐ活動となる。

新ペガサスにより今後も地域の方々と直接触れ合う機会を途切れさせずに、これからの新たな出会いを活動の励みとし、当館が周辺地域での天文観測の拠点となるべく、さらなる天文普及を目指したい。

活動最終日に　職員と運営スタッフで記念にパチリッ！

平成17年度
寄贈・寄託資料一覧

No.	寄贈・寄託者	資料名	分類	数量	受入
1	内藤顕輔	膳箱・徳利	民俗	2点	寄贈
2	神保教子	着物	民俗	1括	寄贈
3	大久保昌二	豆腐行商箱・ラッパ等	民俗	3点	寄贈
4	小沢静男	出征兵士幟・養蚕関係資料ほか	民俗	22点	寄贈
5	林　繁	焼印・小物入れ	民俗	2点	寄贈
6	瀧島幸市	国債貯金通帳ほか	民俗	4点	寄贈
7	上飯坂保	蝿とり紙	民俗	1点	寄贈
8	村野由次	車長持・錠前・消防半纏	民俗	3点	寄贈
9	古山直之	写真機材一式	民俗	1括	寄贈
10	飯島一郎	地券（府中駅）	歴史	56枚	寄贈
11	大熊利武	大熊利武家文書	歴史	40点	寄贈
12	三輪修三	多賀城跡出土古瓦	考古	3点	寄贈
13	内藤顕輔	子の権現関係資料	民俗	1括	寄託


豆腐屋行商箱・ラッパ等

平成17年度利用状況

3月 梅まつりでの1コマ

区分		有料		減免	合計
		一般	団体	（障害者・4歳未満等）	
博物館観覧者 開館日数311日	大人	168,419	9,622	23,700	201,741
	子供	29,595	25,237	54,386	109,218
	小計	198,014	34,859	78,086	310,959
上記のうち プラネタリウム観覧者 投影日数293日	大人	17,076	1,281	3,369	21,726
	子供	8,446	10,543	2,436	21,425
	小計	25,522	11,824	5,805	43,151

『府中市史』刊行から40年、その間の発掘調査や研究の成果を盛り込んで、装いを新たにした市史ができました。カラフルで読みやすい編集です。府中の歴史を手っ取り早く知りたい方にお勧めです。
A5版463頁 ＋ 付編　3500円　博物館ﾐｭｰｼﾞｱﾑｼｮｯﾌﾟでも取り扱っております。
内容等のお問い合わせは府中市教育委員会文化財担当まで。

郷土の森博物館の主な刊行物

＊博物館ブックレット＊

府中にかかわる関心の高いテーマについて、最新の研究内容を、写真や図版を多用して分かりやすくまとめました。小型（A5版）で持ち歩き易くなっています。

1. **甲州街道府中宿**　72頁　900円
2. **古代武蔵国府**　64頁　完売
3. **詩人 村野四郎**　64頁　800円
4. **武蔵の国府と国分寺**　64頁　完売
5. **武蔵府中くらやみ祭**　64頁　600円
6. **古代武蔵国府（改定版）**　120頁　600円
7. **ケヤキ並木の謎**　64頁　800円
8. **あすか時代の古墳**　64頁　600円
9. **宮本常一の見た府中**（今年度刊行予定）

＊府中市内家分け古文書目録＊

博物館に寄贈・寄託されている、府中市域の家別の古文書の目録。年1冊づつ刊行中。

1. **新宿 比留間家文書目録**　1,315件　200円
2. **上染屋 村野家文書目録**　994件　100円
3. **本宿 内藤清兵衛家・内藤治左衛門家文書目録**　1,114件　200円
4. **八幡宿 田中家文書目録**　521件　200円
5. **押立 町有文書目録 (1)**　1,894件　400円
6. **押立 町有文書目録 (2)**　1,379件　300円
7. **大国魂神社文書目録 (1)**　1,702件　400円
8. **大国魂神社文書目録 (2)**　1,220件　300円
9. **大国魂神社文書目録 (3)**　912件　300円

＊その他＊

他にも博物館の刊行物として、季節ごとの星空とプラネタリウムの案内、2か月ごとの催しもの案内である「かれんだー」等があります。また最近では紙の情報誌だけでなく、HP.からもアクセスしていただけます。

＊郷土の森博物館紀要＊

年に1冊づつ出される博物館の研究論文集。当館学芸員の他、周辺研究者、博物館ボランティアなどが多岐にわたるジャンルで執筆しています。

最新第19号目次

＊1000枚の写真をたどって
－民俗学者宮本常一写真の追跡調査記録－
博物館ボランティア資料整理班＆佐藤智敬

＊国府のなかの寺と堂
－武蔵国府跡の発掘調査事例から－
深澤　靖幸

＊『大岡越前守忠相日記』にみる府中御前栽瓜
船本　道子

＊《講演録》府中の民俗資料　宮本　常一

＊武蔵・野々宮神社と府中六所宮
－祭礼と文芸をめぐる新資料から－
小野　一之

＊年報＊あるむぜお＊

年報は博物館の様々な活動を年度ごとに報告しています。最新号は第19号（平成16年度）です。博物館の軌跡（きせき）を詳しくたどれます。

本誌「あるむぜお」は季刊発行の館報です。創刊号以来続いているのは、その時々の研究トピックスを学芸員が交代で執筆している「NOTE」、「最近の発掘調査」などです。博物館と市内各所で無料配布しています。

★「あるむぜお」は定期購読できます！★

「あるむぜお」の送付ご希望の方は1年単位で承ります。4回分の送料320円（切手でも可）を添えて、受付カウンターでお申込みください。

リニューアルトピックス

―展示室再生―

さらに市民に愛される
郷土の森博物館をめざして

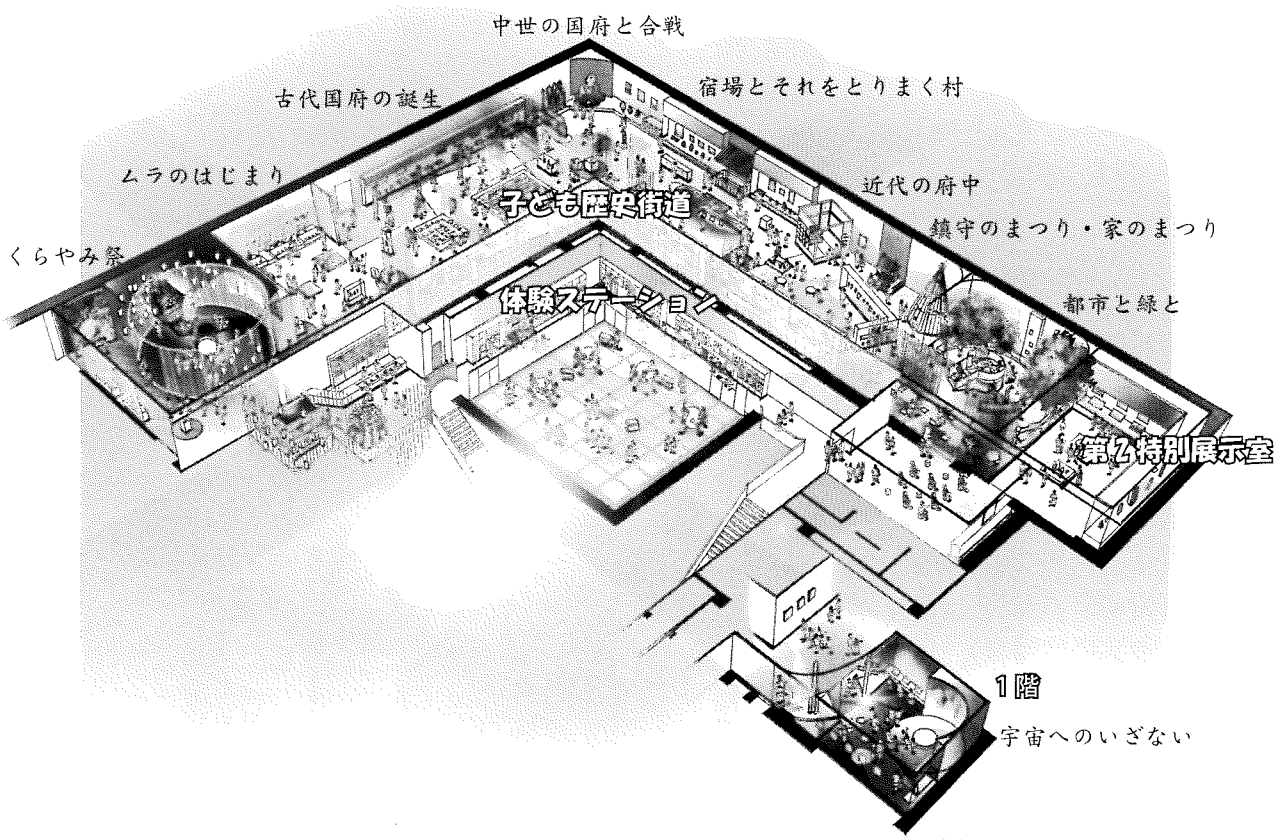
① 基本設計発表

1987年4月に開館した郷土の森博物館。広い敷地の中に農家や商家、学校、町役場などが点在し、市の花ウメをはじめとした季節の花々も楽しんでいただけます。その活動においても、園内の田んぼでの1年をとおした水田学習や自然観察、民家を使ったお話会等々、この施設ならではの展開が試みられてきました。

それら全ての発信の素があり、キーステーションであるのは、プラネタリウムも併設する本館の常設展示室です。しかし、満19年の↗間には設備にも不具合が生じたり、何よりも研究が進んで分かってきた新しい情報をより見やすい形で展示していく必要が出てきました。

人が20歳の成人式を前に未来を考えるように、この展示室も「博物館のこれから」を見据えたリニューアル計画が立てられ、昨年度末に下図のような基本設計図ができあがりました。その方針には次の5つの柱があります。

1. 地域の博物館として府中とその周辺地域の歴史・民俗・自然が学べる展示とする。↙



2. 実物資料を重視し、その保存環境にも配慮する。
3. わかりやすく楽しみながら学べる参加体験型展示を設け、教育普及活動に対応できるようにする。
4. ユニバーサルデザインの考え方に基づき、あらゆる人にとって使いやすく楽しめる展示とする。
5. 持続的な資料の展示替え、情報やソフトの更新(こうしん)、展示装置の再利用など、ランニングコストの低減や環境に配慮する。

ただ、建物本体の躯体(くたい)は簡単にいじれないという制約と、経費という大きな問題がありますので、工事はゾーンを5つに分けて、2007年度～2011年度の5年間で行うことになりました。

今後まだ変更点も出てくるでしょうが、今年度は第1次工事の実施設計をおこないます。「あるむぜお」誌上ではリニューアルの要点を随時お知らせしていきます。

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.76 発行日 2006/6/20
編集・発行（財）府中文化振興財団 府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町6-32 TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/